第３種郵便物認可　京都新聞

京都大人文科学研究所助教授　高階　絵里加氏

# 研究に最適・奥深い京都

たかしな・えりか　東京大文学部美術史学科卒。同大学院博士課程修了。文学博士。2000年より現職。おもな著書に『異界の海―芳翠・清輝・天心における西洋―』、翻訳に『北斎百人一首うばがゑとき』『マネ』『モネ』『ピカソ』『シャガール』等がある。

## 提言

## 伝統の蓄積が「斬新さ」生む

京都に来て四年になる。移り住んで半年目ぐらいのころには、よく「京都はいかがですか」と聞かれた。

そのたびに私は「大好きです。自然が美しく、四季の変化が身近にあって生活の中に生きている。空気や水がきれいでお豆腐やパンやコーヒーがおいしい。どこへ行くにも自転車でOKで、人ごみやラッシュがないのもいい。何よりも町の大きさが、人間が活動するのにちょうどよい。たとえば、異なる学問分野の人たちがこんなに気軽に集まって夜中まで議論できるなんて、東京だったら交通事情ひとつ取っても考えられません。研究には理想的な環境です」と答えていた。その思いは今でも変わらない。

### ■欧州に近い雰囲気

私が今までに暮らしたことのある町は、東京、パリ、ニューヨーク、ピサ、カイロ、フィレンツェ、シエナ、ラーレー（合衆国ノースカロライナ州）、ストラスブール、アーヘン等いろいろだが、京都は地形や文化財の豊かさ、人の性質などからみて、フィレンツェに雰囲気が近いような気がする。

また、パリと京都にも似ているところがある。日常生活では見た目よりも実質を大切にすることや、自由な学問の気風があること、そして賀茂大橋を渡るときの鴨川風景は、カルチエ・ラタンからルーヴル美術館へ行くときにカルーセル橋から眺めるセーヌ河を、いつも私に思い起こさせる。

町の真ん中に流れる川は、人の心をゆったりと受けとめ、さまざまな思いを解き放つ。そんな川は、東京の中心部にはほとんどなくなってしまった。私にとっての京都は、東京よりもヨーロッパに近いのかもしれない。

これまで私は、近代日本と西洋の美術を勉強してきた。もともとは十九世紀の西洋美術史を学んでいたのだが、あるとき、「同じ時代の日本にはどんな絵があったのだろう」と素朴な疑問がわき、その後は明治美術の多面体のように複雑な魅力にひかれていった。

美術史の具体的な研究の方法は、まず美術作品そのものの調査、それから資料を収集するのだが、作品の謎を追いかけて美術館や資料館を回っているときは、実にわくわくする。戦災を受けなかった京都には、建築物をはじめ東京にはない近代の文化の積み重ねがあると聞く。きっとこれからまた新しい作品や資料に出合えるに違いないと思うと、楽しみでたまらない。

## オピニオン解説

### ■魅力の異分野交流

京都ではなんといっても、異分野間の交流が盛んに行われていることが大きな魅力だ。東京では専門家同士の研究会や会議は多いが、だれもみなそちらで手いっぱいで、なかなか他の分野から刺激を受けるチャンスがない。

私も、東京にいたときはもっぱら美術関係の人々と交流することが多かったが、京都に来てからは、歴史学、建築学、文学、人類学、言語学、社会学、民俗学などさまざまな領域の専門家と話をする機会が増えた。たとえば一枚の絵画を、その当時の社会の動きや思想の潮流、あるいは音楽・文学・演劇といった他のジャンルの芸術と関連付けて考えることがもともと好きな私にとっては、願ってもないことだ。

とはいえ「みやこ」の奥深さは一朝一夕に理解できるようなものではない。自分の住んでいる町でありながら、私は京都についてまだ何もわかっていないに等しい。けれども、斬新なアイデアは、本物の伝統の蓄積のあるところにこそ生まれる。パリがそうであるように、日本の中では京都こそが、その役割を担える都市なのではないだろうか。